弟子たちの訓練

会期 6: 自分が弟子かどうかはどうやってわかるのか?(3)

ロン・ライブリー、M.Div.、M.A.による提供 – BiblicalMentoring.org(学問)

ステップ1:開会の祈り

ステップ2: 各人が記憶の節を引用します: ヴァース: **マタイによる福音書 7:21**
21節「わたしに『主よ、主よ』と言う者は皆天の御国に入るわけではない、
天におられる私の父の御心を行う方です.

ステップ3:*聖書の章全体または一部 – マタイ7章を読み、議論する*

ステップ4: 個人申請やグループディスカッションのための質問:

一. 誤認の話に基づき、なぜキリスト・イエスの弟子であることが重要なのでしょうか?それによって、イエスが私たちを弟子造りの仕事に用いられるようになるのではないでしょうか?それは、キリストのような存在感を持つことです。

二. 世界は私たちの人格がスキルや能力よりも重要だと認めてくれません。この文化的原則にどう対抗できるでしょうか?それは「仕事による価値」の考え方です。

三. 神だけが人々を悔い改めと告白へと動かせる唯一の方であることを理解していますか?神だけが人々を信仰に回心させることができる方です。創造的な伝道のスキルを身につけるのではなく、私たちの仕事はキリストの人格を育み、それから単にキリストとその王国について証しすることです。魂を回心させる仕事を神に任せましょう。

四. 著者の主張の大きな部分は、キリストの性格を表す多くの美徳の中で、イエスを神の子として区別する四つの資質があり、これらの資質が神と御子の関係、そしてキリストと教会の関係を表すものでなければならないというものです。これらの資質は弟子と師匠の関係にも存在すべきだとあなたは思いますか?

五. フィリップスは、従順、服従、愛、祈りというこれら四つの資質や目標が、弟子を作る者として仕える技術を導く指標であると示唆しています。これを「他者を育てる弟子を育てる」と「繁殖する弟子を育てる」と呼んでいます。なぜこの訓練の強調が不可欠なのかを論じてください。

ステップ5:*本の内容を読んで議論してください:*

第3章 著者による キース・フィリップス:

多くの人が自己死を経験し、完全にキリストに献身していると主張します。しかしイエスは言われました。「私に『主よ、主よ』と言う者は皆天の御国に入るわけではない。しかし、天におられる私の父の御心を行う者は必ずしも入るのだ」(マタイ7:21、斜体を追加)。

友人のエドの経験は、誤認の深刻さを示しています。金の急騰がカリフォルニアのゴールドラッシュの再興を呼び起こした際、エドは「母鉱脈」の地帯で不動産を購入し、そこで一攫千金を狙いました。2か月間、彼は18時間労働しましたが、見つけたのは土と岩だけでした。そして黄色い鉱石を発見しました。彼は大金鉱を掴んだと思いました。彼は鉱石を急いで鑑定士の事務所に持ち込み、さらに多くの人を雇い、ヨーロッパ旅行を計画し始めました。

しかしエドの困惑に反して、鑑定士は自分が採掘した鉱石は愚か者の金だと発表した。エドは信じられなかった。彼は間違いを犯したと確信していた。しかしエドがどれだけ強く抗議しても、炉から漂う腐敗した硫黄の臭いには異論がなかった。鉱石自体が問題を解決した。

鉱夫は自分の発見が金であることを確信しなければ、それを使って商品やサービスを得られません。神も同様です。神は私たちがキリストの弟子であることを要求し、その前に神の働きのために使われることを許されます。

では、自分がキリストの弟子かどうかはどうやってわかるのでしょうか?自己死を経験し、子孫に値するかどうかはどうやってわかるのでしょうか?あなたが愚者の金の霊的なバージョンか本物かを判断する決定的な証拠は、キリストのような存在です。もしキリストの人格が欠けているなら、あなたは自分自身に死んでおらず、子孫にふさわしくありません。

おそらく最も困難な壁は、自分の人格がスキルや能力よりも重要だと本気で信じることです。これは世界にとってあまりにも馴染みのないことで、たとえ自殺を決意しても、それは異質に感じるでしょう。

私はこの点に大きな葛藤を経験しました。長年にわたり、説教者たちが人々にキリストを受け入れさせるためにあらゆる感情的な手段を使うのを聞いてきました。ある者は会衆に懇願し、キリストに従うことはキリストの恩恵であると示唆しました。また別の者はあまりにも広範な招待状を出し、正直な人が座席に残されるべきではないと言いました。彼らは悪い考えを抱いたり、不純な動機を抱いたり、聖書の教えを破った者には前に出るよう促しました。彼らは、神が彼らの懇願に応えた人数で裁くかのように説教し、キリストのような人間への慈悲で裁くのではなく。

だから、キリストに導く人が多いほど、自分は価値があると考えていました。私は人々をキリスト教の集会に引き寄せようと、パイ投げ競争、水風船の戦い、さらには幽霊屋敷など、福音を売り込むような仕掛けで人々を惹きつけようとしました。救いの計画のプレゼンテーションを磨き上げ、説教後に使う招待状も洗練させました。祭壇への呼びかけに対する小さな反応は私を恥ずかしくさせました。私は「働く価値」という考え方を持っていました。

私は心の中で、悔い改めと告解に動かすのは神の霊だけであり、私はただ証しをするためだけに召されているだけで、改宗するのではないと考えていました。しかし、私は自分のキリスト教的な生活の質や他者の救いが伝道の技術と創造性にかかっているかのように振る舞っていました。

ついに、聖書は私に真実を知らせてくれました。まず第一に、神は私にキリストの人格を持つことを望んでいました――キリスト者であること。その時初めて、神は私を通してご自身の栄光のために働かされるのです。

なんと心を解く啓示でしょう!私は活動や人間の反応を義と誤解していました。私は忙しさを礼拝の代わりにしていました。突然、私の善行に対する安心感が壊滅しました。

真実は痛いほど明白でした。病人を治療するにはまず医者でなければなりません。弁護士になる前に弁護士でなければならなかったのです。だからもちろん、キリストの働きを行う前にキリストらしくなければならなかったのです。

キリスト教の人格とは、「神があなたをご自身の国と栄光に招くにふさわしい歩みを歩む」(テッサロニケ人への第一の手紙2:12)を可能にする精神的・倫理的な資質の組み合わせから成ります。それは聖霊の実、すなわち愛、喜び、平和、忍耐、親切、善良、忠実さ、優しさ、自制心を示します(ガラテヤ人への手紙5:22,23)。

キリストの働きを慎重に検証すると、その生涯を体現する美徳の中で、神の唯一の御子として他のすべての人と区別される四つの資質があることがわかります。それは従順、服従、愛、そして祈りです。

これを初めて知ったとき、私は驚愕しました。受肉した神は、この四つの資質の基盤の上に教会を築くことを選んだのだろうか?それらは弱い人間の典型のように思えました――方向性や動機、自信を完全に他者に依存している人。

しかし、それこそがまさにその通りでした。これらの資質は、キリストと父なる神の関係を完璧に表していました。キリストの力は、全能の神への依存から生まれました。そして、もし私が神に用われるなら、主の関係を模範にしなければならないでしょう。キリスト者としての性格は、私の意志を行使して、人生のあらゆる側面をキリストのかたちに合わせることによって築かれます。

一部の信者は、自分の才能が使われることを条件に弟子奉行のミニストリーに参加しようとしました。しかし、そのような考え方は自己死の否定であり、彼らの価値観が歪んでいることを示しています。弟子の主な関心は、自分の人格が築かれ、再生産されることであるべきです。哲学博士、神学修士、ソーシャルワーカーが必ずしもワールド・インパクトのような宣教組織にとってより価値があるわけではありません。彼は他の誰とも変わらぬ扱いを受けています。私たちは皆、弟子を作ろうと努力しますが、それはまず弟子でなければ不可能だと知っています。神を知らしめる前に、私たちは神を知らなければなりません。

弟子は、王国を築いたり身体を築き上げたりするあらゆる賜物や才能を用います。彼は自分の誇りを損なう能力やキリスト教的成熟を妨げるような能力を自信を持って行使しません。死者の焦点は神にあります。彼はキリストのようになろうとします。

もし誰かが自分の評判や能力、資格に安心感を見出す理由があるとすれば、それは使徒パウロでした。しかし彼は、それらがキリストのようになること(ピリピ人への手紙3:8)に比べれば、すべてがくだらないものだと気づきました。人の技は敬虔な人格なしには無価値です。もちろん、どんな人間も自分の力だけでそのような資質を得ることはできません。しかし神は弟子たちを「御子のかたちに合わせるように」あらかじめ定められました...」(ローマ人への手紙8:29)

ある日、友人とカリフォルニア沖を航海していたとき、予期せぬ濃霧が押し寄せ、視界をほぼ完全に奪ってしまいました。私たちは港に戻れないのではないかと恐れていました。霧の中を約45分間漂っていたとき、突然かすかだがはっき

りとした霧笛の音が聞こえました。その歓迎すべき音に合わせて進路を決め、慎重に近づくことで、最終的に無事に港に戻りました。もし霧笛の音が聞こえなければ、私たちは海の中を目的もなく漂っていたでしょう。

人生の目標がなければ、方向性を失って漂い続ける可能性が高いです。何も目標を持たなければ、たぶんそこにたどり着くでしょう。だからこそ、キリストがあなたに望む姿を十分に理解しなければなりません。

服従、服従、愛、祈りは、あなたとあなたが導くすべての弟子が目指すべき目標です。それらは、あなたが弟子にする者たちの成長と進捗を測るバロメーターとして機能します。それらは非常に重要なため、次の章で個別に検証していきます。

pp。33-37

弟子のチェックリスト – 自分が弟子かどうかはどうやってわかるのか？
____ 私のキリストのような性格は、私の自己死(弟子であること)の証拠です。
_____ 私の人格は、私のスキルや能力よりも重要です。

***ステップ6**：個人的な祈りの願いを共有し、それぞれがお互いの願いを祈ります。*

出典： 弟子の形成 キース・フィリップス博士著。フレミング・H・レヴェル社出版、1981年。ISBN 0-8007-1181-5。ロバート・E・コールマンによる序文。内容(学習問題を除く)は本書から抜粋し、改訂は加えていない。

改訂20261011